鎮魂と決意の春に

江別医師会　会長
野幌病院　理事長
野呂英行

戦争を知らず、飢餓を知らず、平和と安全をくらしの前提として明日を語り、今日を生きてきた私自身をはじめ、すべての日本人が、計り知れない衝撃と耐えきれない哀しみに襲われてひと月半、被災地、被災者の映像を見るまでもなく、雨の冷たさ、風の激しさにも被災地の空に心が飛ぶ。

愛する肉親や知人を目の前で失う衝撃、また生き残った喜びにひたる間もなく、築いた歴史とくらしのすべてを失うという、まさに悪夢としか映らない現実を受け止め、耐え抜く力をどこに求めればよいのか、思わずわが身に置き換え暗たんたる日々を過ごしている。

とはいえ、日本人として、また医療従事者として、私達にはなすべきことがある。

いち早く現地へ飛び、自らも被災しながら壊滅的な医療機能を必死で支える仲間とともに日夜、懸命な医療活動に従事した同僚には心から敬意を表したい。

せめて少しでも多くの復興支援金を、との思いから、当医師会で募金団体の申請を行い募金をお願いした結果、400万円を超える貴重な浄財が集まった。厳しい経営環境の中、多くの会員が寄せてくれた善意に感謝したい。

長引く避難生活からくる被災者の健康状態は危機的であり、また地域の“くらし”を取り戻すためには、医療機関の機能回復が最優先の課題であるが、犠牲となった医師や関係者も多い。患者を前にしながら廃業や転出を迫られる仲間の辛さや悔しさは計り知れない。

被災者の、そして日本の闘いは始まったばかりである。この長く厳しい現実から決して目をはなさず、心をそらさない決意として、３月の定期総会において「東日本大震災への支援声明」を全会一致で採択した。

今、私たちは被災者のために何かをしてあげる、のではないと思う。現地へ行ってきた医師はじめボランティアの方たちは被災者のために何かをしてあげた、という気持ちはないはずである。何かもっと大きなもの、大切なものをひとりひとりが、ふるさとに、わが家に、そして職場の“日常”に持ち帰っているのではないかと私には思えてならない。

被災地精神医療支援を終えて

旭川市医師会
メイプル病院
松尾徳大

私は旭川市内にある精神科病院に勤務をしている松尾と申します。３月11の東日本大震災に際し、被災地である宮城県、東北大学の派遣要請を受け、３月23日から４月１日まで、現地で医療支援活動を行って参りました。

派遣された場所は宮城県岩沼市で、市の沿岸域も津波で大きな被害が生じました。市内の小島病院のみ被害を辛うじて免れましたが、周辺の他の精神科機関は地震による倒壊や津波被害により診療継続能力を喪失してしまいました。また、福島原発問題から、避難区域内の精神科病院が診療を中止してしまったため、福島県の原発以北から岩沼市まで、沿岸地域で機能している精神科機関は事実上そこしかない状況でした。周辺の沿岸各市町には、家を流され、家族が犠牲になった方が甚大な数に上りますが、その中には精神科に通院していた患者さんも多数おられました。しかし、受診医療機関のほとんどが被災により診療を停止してしまったため、内服薬等を求め、唯一機能の残った小島病院に患者さんが殺到する状況でした。

私は主に予約外初診および再診の外来支援に入りましたが、病院機能を守るため、表向き新患受け入れを中止しても、通院先を無くした患者さんが連日多数受診されました。照会先が津波の泥流に埋まってしまい、治療歴や内服の詳細な情報も分からない中での外来初診業務の連続は困難を極めました。また、当時はガソリン不足が深刻で、受診にこられた患者さんの中には自衛隊や知人の援助を受けて辛うじて病院にやって来られる方もおり、なかなか病院に来られないため、長期処方を望む方がほとんどでした。

１週間の外来支援を通して、いわゆる急性ストレス障害や今後のPTSDを懸念するような症例は現段階では少ない印象でしたが、今後長期のフォローが必要と思います。事態は徐々に改善しているようですが、当該地域の精神科医不足は深刻で、５月以降から支援の当てが全く得られず、膨れ上がった患者数に対処できる医師数が絶対的に不足し、今も強く精神科医の支援を募集していると伺っています。今後も継続した支援が切に必要であると特筆大書して筆を擱きます。